

## 【 Ver.1.3 → 1.3.1 の 変 更 点 】

### \* p2 3.凝集の見方

3) 下図のようにセルボタンを上にして沈渣を流し、試験管を傾け揺らしながら凝集の有無を観察する。

変更

3) 下図のようにセルボタンを上にして沈渣を流し、試験管を傾けながら凝集の有無を観察する。

### \* p2 (2) 凝集反応の分類

反応の強さは、試験管を小刻みに揺らしセルボタンをほぐしながら、凝集塊・・・・・・・・

変更

反応の強さは、試験管を傾けながらセルボタンを管底から剥がす様に観察する。凝集塊・・・・・・・・

### \* p15 【図 12. スクリーニング陽性から抗体同定までの手順】 図の一部改訂

#### \* 赤血球検査のガイドライン改訂に伴う削除文章

p16. ii) 反応パターンと反応強度が抗原表の特異性の組み合わせと完全に一致する抗体（複数抗体）

#### \* p16 (3) 消去法

前) 注 1 : Di (a+b+) 赤血球や K+k+赤血球の反応が陰性の場合には暫定的に抗 Di<sup>a</sup> や抗 K を消去する

新) 注 : K と Di<sup>a</sup> の量的効果は明確ではなく、またホモ接合体のパネル赤血球の入手も困難なことから、ヘテロ接合体の赤血球の反応が陰性の場合には、暫定的に抗 Di<sup>a</sup> や抗 K を消去してもよい。その際、抗原表に記載してある各抗原の '+' および抗原名に『×』を付記する。

追加

#### \* P16 (3) 消去法

注 : IgG 感作赤血球の表記は凝集の強さに関係なく「+」で表記する。IgG 感作赤血球を用いる目的は間接抗グロブリン試験が適切に行われたかを確認するためであり、凝集判定に用いる表記法に従う必要がないため。

以上 6 箇所を変更いたしました。